

# がん研究の社会認識論の可能性を広げる

清水 右郷 (Ukyo Shimizu)

日本学術振興会特別研究員 P D (京都大学)

個別科学の哲学の一つとしての医学の哲学は、特にここ 10 年ほどの間に様々な著作が刊行され、活況を呈している。本報告では、その中でも特徴的な二つの著作を照らし合わせることを通じて、がん研究の社会認識論的分析について考察を深める。

医学の哲学を扱う近年の研究書の中でもとりわけ興味深いものの一つが、Plutynski (2018) *Explaining Cancer: Finding Order in Disorder* である。本書は「がん」という一つの疾患を集中的に取り上げ（ただし、それが本当に「一つの疾患」と言えるのかも問い直されるのだが）、がんをめぐる基礎医学・疫学・進化医学などの多様な研究分野に立ち入って、自然種・因果推論・進化などの多彩な科学哲学の話題を論じている。本書刊行後、2019 年にはスタンフォード哲学百科事典に同著者の執筆した **Cancer** の記事が掲載され、2021 年には同書がラカトシュ賞を受賞するなど、Plutynski の研究には際立った存在感がある。

彼女のアプローチは次のようにまとめられるだろう。がんの理解を深めるためには、細胞や分子を研究するマイクロレベルの基礎医学に「降る」ことと、環境疫学や進化医学などのよりマクロなレベルに「昇る」ことの両方を必要とし、歴史的状況に応じてそれぞれの研究領域で様々な目的の探究が行われてきたことに注意を払わなければならない。このようなアプローチに意義が生まれるのは、現に多種多様ながん研究が膨大に行われてきたという歴史的事実があるからである。例えば、医学系の文献データベースの PubMed で **cancer, cardiovascular disease, diabetes, depression** などのよく知られた病名を含む文献を検索してみると、少なくとも第二次大戦以降は **cancer** を扱う文献が一貫して最も多い。おそらく、現在に至るまでの医学の歴史において、がんは最も熱烈に研究されてきた病気である。

Plutynski 自身が強調しているわけではないが、彼女のアプローチには社会認識論的な側面がある。そのことは、Solomon (2015) *Making Medical Knowledge* で披露された医学を対象とする社会認識論と照らし合わせてみるとわかりやすいだろう。同書は医学における複数の方法（コンセンサス形成、EBM、トランスレーショナルリサーチ、ナラティブアプローチ）の特徴や歴史を並行して検討しながら、医学全体が「乱雑な」方法論的多元主義に基づいて進展していることを示そうとする。前述の通り、Plutynski はがん研究に特別な焦点を当てる一方、Solomon は病気の範囲を絞らず医学全体を分析しているといった違いはあるが、医学研究の多様性や歴史的経緯を踏まえた上で俯瞰的な分析を行う点で、両者はいくらか似ているところがある。EBM は疫学に近く、トランスレーショナルリサーチは基礎医学に関係が深いことを考えても、Plutynski の研究を Solomon の方法論的多元主義の観点から捉え直すことができるという発想はそれほど突飛なものではないはずだ。

もちろん、二人の著作の間には重要な違いもある。Solomon が方法論的多元主義を語る際に「乱雑な」という形容詞を加えているのは、同じ問いに対して複数の方法が適用され、それによって対立的な答えが生じ、さらに競合する方法の優劣を決定するメタ方法論が存在しないという状況を指し示すためである。このような状況は、別々の方法が別々の問いに適用され、対立が生じることのない「整った (tidy)」方法論的多元主義と対置されている。要するに、Solomon が注目しているのは、複数の異なる特徴を持った方法の交差点であり、特にその交差点で生じる対立をどのように管理しうるのかという問いである。他方、Plutynski は、がんという病気を様々な仕方で「分解」し、諸要素の相互作用を様々な観点で研究できることを強調するが、交差する研究が生み出す対立に特別なこだわりを持っているわけではない。

がん研究を「乱雑な」あるいは「整った」方法論的多元主義で分析することは可能だろうか？ 実のところ、Solomon の著作において「乱雑な」方法論的多元主義を証拠づける事例として示されているのが、40 代女性に対する乳がんのマンモグラフィ検診の是非をめぐる論争である (ch. 9)。この事例は、がん研究の社会認識論的分析の可能性を示すものと言えるだろう。そのような先例に倣って、複数の研究領域の交差点および対立点に注意を向けることで、Plutynski のアプローチをさらに発展させることができるかもしれない。

以上のような見立ての下で、本報告では、Plutynski の著作を Solomon の社会認識論から再解釈することを通じて、がん研究の社会認識論の発展を目指す。本報告では、二人の著作を手短に紹介した後で、Plutynski の著作において複数の研究領域の交差が表れている具体例として、疫学とメカニズムの関係をめぐる二つの論点に注目する。一点目として、彼女はいわゆる Russo-Williamson テーゼ (Russo & Williamson, 2007) を批判し、がん疫学の因果推論はメカニズムの証拠を要しないと主張している (Plutynski, 2018, ch. 4)。二点目として、20 世紀半ばに提唱された「多段階変異理論」は (Armitage & Doll, 1954)、年齢とがん死亡率の一貫した統計的パターンからがんのメカニズムの示唆を生み出すものだったと彼女は論じている (Plutynski, 2018, ch. 6)。この二つの論点に対し、Solomon の著作やその他の関連研究を踏まえて検討を加えることで、疫学研究と基礎研究が交差しながらがんの医学を進展させる仕方について、社会認識論的な観点からの理解を深めたい。

#### 参考文献

- Armitage, P., & Doll, R. (1954). The age distribution of cancer and a multi-stage theory of carcinogenesis. *British Journal of Cancer*, 8(1), 1-12.
- Plutynski, A. (2018). *Explaining Cancer: Finding Order in Disorder*. Oxford University Press.
- Russo, F., & Williamson, J. (2007). Interpreting causality in the health sciences. *International Studies in the Philosophy of Science*, 21(2), 157-170.
- Solomon, M. (2015). *Making Medical Knowledge*. Oxford University Press.